

ハルトマンの叙事詩「エーレック」

——宮廷叙事詩の

表現の寓意性について——

高 津 春 久

ハルトマン・フォン・アウエが最初に書いた叙事詩 *Erec, der Wunderære* はその原據であるクレチアン・ド・トロワの物語 *Erec et Enide* の大筋の展開とその段落の区分をほぼ忠實に踏襲してはいるが、これを彼の晩年の作品イーヴェインの原據の取り入れ方にくらべれば、そこに大きな相違がみとめられるのである。イーヴェインを書くとき、詩人はそれまでに充分洗練を加え、どのような微妙な表現にもかなうその詩語によって原據の表現をたどって、その精神を正確に自國語によってあらわすことができた。しかしこの初期の詩作の試みでは、彼のドイツ語はまだ十分にそれぞれの対象の中心を射とめるものではなく、原據の流暢な描寫を再現するには充分ではなかった。その代り若い詩人は彼独自の創造的な部分を後の作品よりもはるかにより多くこの物語の中に作り出しているのであり、本來の詩人をそれだけよくここに見出すことができる。ハルトマンのこの物語がイーヴェインの場合とちがって、その原據とされるクレチアンの作品の内容とかなりちがっていることを知ると、人々はハルトマンがクレチアンの物語の中で今日伝えられるのとは異った系統のものをを用いたのだとか、他の同系統の説話を原據として併用したとか、種々の推測を立てた。そしてその中には當然これらの相違点を若い詩人のさかんな空想力や創造性が原據に對して試みた意味深い變形と見る見方もある。Hugo Kuhn の論文 “Erec” (1948) の叙述は明らかにこのような見方にもとづいてハルトマ

ンの獨自性をしばしばそのクレチアンとの相違點から引き出そうとしている。

ここで詩人の心をうながして、この物語を自國語によって人々に伝えようとさせたのは、この物語が当時のヨーロッパ騎士階級共通の關心事である騎士生活の理想や規範をその中心テーマとしてあらわしているからに外ならない。騎士階級が形成されるにつれて、封建體制の中での自己の生活や人格の可能性を各人が自覺的に吟味する傾向が、すでに十一世紀の終り頃から見えていた。それまで領主を中心に結束していた封建社会は、次第に騎士の一人一人が自分に保證された生活圏の中で、實現すべき共通の理想を模索する官廷社會へと變質する。騎士階級の中でとりわけ強い個性を持つ者は彼等がそこから出て行くことのできない確固とした組織の中で自己の人格と生活に關して可能な自己實現の方向をさがしとめる。八音節の宮廷物語はそれが生れた時から本來自由な個人としての自己を、ゆるがぬ封建的な體制の一構成員という限定の中で探求する騎士を描くべく定められていた。それはすでに至上の強大な權力をえがいたり、讚美する文學ではない。各自の生活の中で實現されるはずのいわば普遍的な生活の理念をえがくものである。このような物語は現實的な設定の中に登場する一人の特定の人物を豫定しない。物語の主人公の行動が、それらが描かれる動機にふさわしくできるだけ普遍的な意味をもつためには、それが時間的、空間的に當時の社會から隔絶し、しかも根底において同質であるような世界であることが要求される。フランスの詩人クレチアン・ド・トロワがその宮廷叙事詩にえがいているアーサー王を中心とした勇士たちの世界がまさにそれである。ここでは、王は架空の世界の中心的存在であり、彼の姿は物語の内容となるさまざまな勇士たちの冒険のかなたに見えかくれて常に浮かんでいるもので、彼自身が冒険の立役者ではなく、むしろ彼は王者の品位と慈愛によって、これら勇士たちの世界の動きを統制する極点ともなっている。すべての勇士たちの行動と理想はつねにこの王の存在によって律せられているとさえいえよう。勇士たち

はアーサー王の宮廷を出て荒蕪の地に冒険をもとめ、やがてまた彼の宮廷へと歸ってくる。王の宮廷は歓喜と祝宴の絶え間ない理想的な人々の集いの場と考えられている。この世界は騎士の徳性と生活の頂点をなす一箇の人格とその恩恵のおよぶ温暖の地であり、理想化された人々の共同社会である。勇士たちの物語のすべてがこの世界からの出発とそれへの帰還を前後に枠として進行し、主人公のこの理想の境地からの離反と、それにつづく彷徨や復歸は、同時に騎士の生活一般への深い寓意や教訓をあらわしている。本来この架空の世界は、すべての事物に理想的な規範にかかわる何等かの意義をそえて提出するに適している。クレチアンは、そして彼と作品の精神において同質的なハルトマンは、この重寶な素材の可能性を充分に意識し、それを汲み出すことを心がけた。彼等はいづれも當時の讀者ならばその寓意の深さとその意味が關連する範圍を、今日の人よりは、はるかに明確にとらえていたと思われるような微妙な象徴をさまざまな事柄の描寫に附加しながら語ることでできる物語の名手であった。このような物語では、箇々の事象にやどる寓意性の方向と深度を測り、全體的な意味を抽出する過程、つまり解釋がきわめて重要なのである。今日では一般にこれらの物語の解釋の可能性は多く、しかも最後のものはまだ我々に與えられていないといえよう。宮廷叙事詩の解釋については R. R. ベゾラがクレチアン・ド・トロワを論じた著書の中で次のように述べている。

「宮廷物語に解りにくい部分が残っているとすれば、この難解さを人々が今まであまりにもしばしばして來たように、中世の作家が無知であったため、その原據となった傳説の意味を見のがしたからであるなどといつてはならない。それは外でもなく十二世紀の物語作者によってこの傳説に與えられた象徴の意味に對して、現代の讀者が無理解であるためなのである。現代の讀者ならびに批評に要求されるのは、最初の傳説とその本来の象徴の意味を再構成することではなく、むしろ十二世紀の作家が、我々をして目撃させる『冒険』によっていおうとしていることを直觀することである。この課題も、先のものにおとら

ず困難なものである。そして現代の批評が、クレチアンの他の物語と同じく『エーレックとエニーデ』の物語の意味について与えた多くの解釈がそのことを説明している。それらの批評がそれぞれ異をたてているということは、われわれの勇気をくじくところではない。むしろこれらの物語の象徴的価値が豊かなものであることを物語っている。十二世紀の宮廷社會に我々と同時代人の精神の形態をあてはめることなく、我々が當時の社會の思想や知性の志向を知りつくすならば、これらの物語の文學作品としての偉大さのみならず、人間的な偉大さをも我々はいつか感じられるようになるだろう。これらの中に描かれてあるものは、實に何一つ全く偶然であるもの、單なる裝飾にすぎぬものではなく、詩人の無根據な幻想であるものもない。」(Reto R. Bezzola : Le sens de l'aventure et de l'amour 1947. S. 77f.)

ベゾラのいうように、これらの物語に描かれた事柄は、それぞれその象徴性が吟味され、他の事象との関連が検討されねばならぬものである。あたかも童話的な純粋さと明瞭な輪郭をもって素朴に提出されてはいるが、そこに描かれた事柄と、このような作品を生み出した當時の騎士たちの生々しい迷いや願望との間にあまりにも関連を拒絶するような空白が感ぜられてくる。これら物語の素朴な描寫は事象の内部的な動機や事物の関連性にまで深く及ぶことを本來拒否しているかに見える。ここではあたかも無関連に見える特異な事件が並列的に語られて行くのであり、その間に関連づけるべきもの、最終的に作品の思想にかかわりあるものを見出すことは讀者に全くゆだねられている。本來、古い傳説の斷片に意味を見出すことから始まって、當時の詩人が物語を作りあげる時の仕事が、すでにこの讀者に課された過程を含んでいるのであり、傳承された素材を騎士の生活様式の理想に關して何等かの發言と批判を含むように選び、あるいは配列する仕事なのである。すでにその制作の方法がこのようにして叙述を寓意的なものとし、出來事の配列によって、より内部的なものや變化し動

いているものを語らせるのである。

クレチアンの場合はケルトの傳説を集成して物語を作ったというのは妥当ではなく、その数多くの宮廷叙事詩は、彼の獨創的な造形力の大きさを物語っており、アーサー王傳説は彼以前に數世紀間傳えられたものであっても、それを當時のヨーロッパ騎士階級の知性の求めに應ずるような特異な形式と意味づけによって描き得たのは彼が最初であった。ハルトマンは彼のエーレックの内容をほぼ事件の配列をそのままに受けついでいるように思われるが、すでに述べたように、そこには彼の後期の叙事詩のとり入れ方よりは原據に對して自由な彼獨自の解釋が見られるのである。ペゾラはクレチアンの作品について「これらの作品に描かれているものは、何一つ全くの偶然ではなく、單なる裝飾にすぎぬものではなく、詩人の無根據な幻想であるものはない」といていたが、重要な寓意をそれぞれの事象に與える用意のあるのは中世詩人ハルトマンについても同様である。それ故ある素材に關して原據とはことなつた取扱いをハルトマンが殊更に試みている部分ではその意味を充分吟味しなければならぬ。したがって最初は物語の微細な部分の象徴性についてクレチアンとハルトマンの相違に拘泥することも必要であろうが、それらの觀察はやがて、その背後にある一般的なもの、思想的なものの相違にまで及ぶものでなくてはならない。P. ヴァブネフスキーの次のような言葉は宮廷叙事詩において箇々の事象の描寫がその機能からどのような位置におかれるべきかを正しく云っている。

「勿論ここでは劇的な筋立てや異常な出來事を語ることが本來の目的ではない。むしろ物象の世界、箇々の事物の世界は透けて見えるので、讀者の眼は箇々特殊なものを通過して、それらの上にあり、それらの形をとってあらわされているところの普遍的なもの、本來的なものへと導かれる。動作、場面、それらの繰返しと呼應は、それら自身の向うに投影されている意味から、つまりより深い所で進行している事象を表示するものとして理解されねばならない。古い形式が新しい意味を盛るのである。」(P. Wapnewski: Hartmann von Aue.

1962. S. 43)

昔アーサー王は復活祭の日、カラディガーンの地に宴を設け、白い鹿を狩ることにした。圓卓につらなって日頃名聲あった騎士、エーレックは王妃ギノヴェールの護衛を申し出る。道中彼等は貴婦人と小人をつれた見知らぬ騎士に出會った。王妃に命ぜられて彼等の名をたづねに行った侍女は小人の鞭に打ちすえられ、かわって小人に應待したエーレックも同様な目に會うが、その時武装していなかったエーレックはすぐに仕返すことをひかえた。彼は王妃に暇をつけ、ひそかにこの三人のあとをつける。

折からイーマイン侯の居城トゥルメインでは祝祭がもよおされており、銀の止り木につながれた一羽のはいたかが當日の最も美しい女性に賞品として與えられることになっている。先程の騎士は過去二年その武力によって自分の戀人のため、この賞品を獲得しており、今年もそうするつもりであらわれたのだった。エーレックは零落したコーラルス伯がその妻と美しい娘エニーテと共に住むみすばらしい館に一夜の宿を借りた。ここで彼はエニーテと婚約して彼女に最高の美を保證するはいたかを得させるため先刻の騎士とたたかうこととする。激しい一騎打の末、エーレックは屈強な騎士イーデルスを打ちまかした。エーレックははいたかを持った得意のエニーテをつれて父のもとにもどり、やがてアーサー王の宮廷で、エニーテとの婚禮をあげる。

これがこの物語の第一部であり、物語の中心的展開を形成する第二部に對する導入部となっている。

冒険と宮廷生活の喜びに明けくれた生活につづいて、第二部の冒頭では歸郷したエーレックはエニーテと安逸の日々を送り、騎士の生活と義務を忘れてしまう。宮廷はこのような彼の變貌に對して、*「たちまち 非難の聲に満ちはじめた。平衡を失った彼の生活態度が彼自身の名譽を傷つけ、宮廷全體の喜びをそこなったのである。ある時、自己に向けられたこのような人々の非難をエニー*

テの口からきき知ると、エーレックは深い決意のもとに彼女をつれて旅立ち、彼女には途中どのようなことがあつても自分に語りかけることのないようにときびしく命じた。

夜、森の中で三人の盜賊が自分達を襲おうとしていることに前方を騎乗していたエニーテが気づいた。エーレックの命令を守って彼にそのことを告げずにおくべきか、と迷った末に、彼女はエーレックに危険の近づくことを教えたのである。彼は盜賊を殺した後、エニーテをはげしくしかりつけ、盜賊から分捕った馬の手綱を彼女に引かせる。森を出る所で再び五人の盜賊に關して同様の事件がおこり、エニーテは計八頭の馬を引かねばならなくなった。これが彼等の旅の第一夜の出來事である。

翌朝二人は、とある伯爵の城下にやって來た。宿でもエーレックはエニーテを遠ざけて坐らせている。伯爵はエニーテの美しさに惹かれて彼女をうばおうとするが、エニーテは奸計を案じて、伯爵には翌日従うことを承諾して、そのことを夜の明ける前にエーレックに告げ知らせる。この警告によってエーレックはすぐさま宿をはらって旅立った。あざむかれた伯爵は手勢を引きつれて彼等に追いつがったが、エーレックとたたかい、深手を負わされた。三度目に自分の禁止を破った妻に對してエーレックは非常に怒り、またエニーテも今まで通りに以後は從順であることを誓う。これが第二夜の出來事である。

エーレックは豪勇の小人の王、グィヴレイツの國へとやって來た。挑まれて彼は小人と激しくたたかうが、兩方が深手を受けた末に、ようやくエーレックが勝った。エニーテに助けられて二人は互いにその傷に包帯を巻き伸直りする。傷のいえるまでグィヴレイツはエーレックを自分の城に引きとめようとするが、ただ第三夜を小人の城で明かしただけで、彼は傷ついた自身に鞭うつようにして旅をつづけるのである。

翌朝エーレックはアーサー王の内膳頭ケイーンに出會った。彼は相手がエーレックとも知らず捕えようとして鬭いを挑んだが、馬から突き落される。丁

度森に野營していたアーサー王の所にもどってからグィーンはその騎士との闘いの模様を告げる。話の様子から相手はエーレックと推察した王は、彼をつれもどすようにと、ガーヴェインとグィーンをつかわした。しかし宮廷生活の楽しみを自から決意して断ったエーレックはガーヴェインに従って王のもとにおもむくことを拒むのである。そこでガーヴェインは自分がエーレックを引きとめておく間に、王が野營の地をエーレックの行く手に移すようひそかに手配し、ここにエーレックとエニーテは不意にアーサー王とその麾下の出迎えを受けることとなる。ここでエーレックの傷は王妃の手によって魔女ファムルガンが作ったと伝えられる秘薬を用いて癒やされるのである。しかしアーサー王のもとで彼は第四夜を明かしただけで、一同の制止もきかず、次の日エニーテと旅立つのだった。

翌朝エーレックは夫が二人の巨人にさらわれたのでなげいている一人の婦人に出會った。巨人のあとを追ったエーレックは二人を次々と倒し、彼女の夫である騎士カドックを無事にかえしてやった。だがこの激しい闘いの結果、癒えていた彼の傷はふたたび口を開いた。出血のため青ざめたエーレックは妻の足下に倒れる。彼女が絶望のあまり夫の剣で自害しようとした時、オリングレス伯爵が現れてこれを制止する。伯爵はここで二人を自分の城に連れて行った。エニーテの美しさに迷った伯爵はその夜のうちに彼女を妻にしようと結婚の宴を開いたが、彼女の悲嘆の高聲がエーレックを失神状態から呼びさまし、ここできながら亡霊のように立上った彼は伯爵を打ち殺してのがれる。伯爵の城で起ったことをエニーテの口から聞いた彼は、その誠實に深く感じて、今までの自分の態度を詫び彼女と和解するのである。

ここでオリングレス伯の城の近邊に住まうグィヴレイツは城での出来事を知られて、すでに知己となったエーレックの身を守るためかけつけた。途中出會った二人は相手をそれと知らずにたたかうが、極度に疲勞していたエーレックは馬から突きおとされる。だがエニーテのその時の叫びが、グィヴレイツに

相手が誰であるかを教えることとなった。三人はおたがいに再會を喜んで第五夜を大きいぶなの木の下ですごした。翌朝グィヴレイツは二人を自分の狩獵館ペネフレックに案内し、エーレックは十四日間、傷の癒えるまでここに滞在する。

二人はアーサー王の宮廷へ歸還する途中、道に迷ってブランディガーンという城にやってくる。今や完全な騎士となったエーレックは、そこで彼を待ちうけている最後の冒険にのぞむのである。この城の近くに「宮廷の喜」(Joie de la curt) と呼ばれる不思議な庭園があって、そこには一人の屈強な騎士が戀人と二人きりで住んでいる。今までに實に多くの勇敢な騎士が彼との鬭いに命を失ったのである。エーレックがこの庭園に侵入すると、たちまち赤い馬にうちまがり、同じく赤い武具を身につけた大男が現れて彼に鬭いを挑んだ。彼等はまず槍を、次に劍をこわしてから、取組み合い、ここで組み合いは得意のエーレックはついに相手を降した。相手はその名がマボナグリーンであることを告げる。エーレックはこの時マボナグリーンより、この庭園に一人ひきこもってその戀人と共に居るわけを話された。それによれば彼女は十一才の時彼と共にその父親の手元からさらわれたのである。彼女は彼への愛情から、彼を一騎打で打ち負かす騎士が現れるまでは自分と二人だけでこの庭に住まうよう彼に約束させていた。エーレックの勝利によってマボナグリーンはこの隠棲の生活から今や解放され、彼は世にむかえられて「宮廷の喜」にもその本來の喜びがかえって來た。この時を待ちわびていたブランディガーンの住民に自己の勝利を告げるべく、そばにある角笛を三度吹くようにとエーレックは云われた。彼が角笛を吹くと、人々は歡呼して集まって二人の勇士に挨拶を送る。今までにマボナグリーンに殺された騎士達の埋葬も行われた。エーレックはここにとじこめられたこれら勇士達の寡婦、八十人の身の上をあわれみ、彼女達をつれてアーサー王の宮廷に歸ることとする。彼はアーサー王と王妃ギノヴェールによってすぐれた勇士として手厚く迎えられ、寡婦達の悲しみもこの宮廷の喜びの中

に消え去るのである。この時エーレックはその父の訃音をうけて、妻とともに急いで歸郷する。

エーレックは國の貴族達の鄭重な出迎えを受け、カルナントで盛大な祝祭を開き、父王の領國、デストレガーレスの王位につけられた。以後彼の宮廷は名聲高く、彼はエニーテと共に終生仕合せに暮したとのことである。

ここで注目しなければならないことは、この物語が一般のアーサー王物語の形式を二度くり返していることである。つまりこの物語の第一部で、円卓騎士が王の宮廷を出てから様々な冒険を試みるうちに、失われた名譽をとりもどし、戀人を得てめでたく歸還するという風に、物語が連鎖する事件の一つの周期を完了した後に、この物語の最も主要な部分である第二の説話群が導入されている。この物語は實際、一般の物語の主人公のめでたい生活の完成を否定することから始まっているといわねばならない。この形式は重要な問題提起の様式である。一人の騎士の生活を常識的にうけとることへの警告であり、それを入念に吟味する態度であろう。宮廷からの出發と歸還を前後の枠としてすべてが完了するのがアーサー王物語の一般の形式である。しかしここではエーレックが第一部の最後で宮廷に歸り、第二部の中程に一度、最後の歸還と合わせて三度にわたる宮廷への歸還がそれぞれの意味をもって設けられているのである。

第一部でエーレックが得た幸福は若い未熟な騎士が一氣に手に入れたものであって、彼は第二部の試練によって自らの幸福の價値を永遠のものとしなければならないのである。ここでもやはり騎士の生活における minne(愛) と ère(名譽)の二つの調和的な完成が問題になっていてエーレックの生活の中心は幸福を得た時から minne に偏したため、彼は怠惰となり、騎士としての義務をおこたり宮廷の空氣をけがした。

ある朝エニーテが人々の非難の言葉をエーレックに告げた時、それは彼の自尊心を深く傷つけ、彼は自己と自己の生活に思い切った試みをくわだてること

となった。

„Dame!”, fet il, „droit an eüstes, et cil qui m’an blasment ont droit. Aparelliez vos or androit, por chevauchier vos aprestez! Levez de ci, si vos vestez de vostre robe la plus bele.”
(2576—2581)

彼はいった。「あなたの言葉は正しい。そして私をその事で非難している者の云い分も間違っていない。今すぐ仕度をして旅の用意をなさい。あちらへ行って、あなたの持っている一番美しい衣服を身につけなさい。」

Als er vernam diu mære, waz diu rede wære, er sprach „der ist genuoc getân.” zehant hiez er sî ûf stân, daz sî sich wol kleite unde ane leite daz beste gewæte daz sî iender hæte.
(3049—3056)

彼がその事柄が何であるかを聞いた時、「もうよい」といった。そしてすぐ立って身を飾り、およそ彼女のもっている一番よい衣服を身につけるよう彼女に命じた。

クレチアンがエーレックにその妻を Dame と呼ばせていること、そして一番美しい衣服を着るように要求させるのは、妻としてではなく、一人の貴婦人として自己の名譽の回復に参加するように要請する改まった態度を示したのである。ここで盛装が通常の旅仕度の意味でいわれているのでないこと、エーレックにとってはエニエテが今までとは全くちがった立場をとって同行することを求めるきわめて象徴的な意志表示であることは、ハルトマンの場合も同様であろう。ここでは一つの外的表徴に託される多くの意味は、勿論ハルトマンの充分の理解のもとに、ほとんどそのままの輪郭を保って再び提出されている。

これに先立つエニエテの言葉はクレチアンの場合、充分に委曲をつくした説明的なものとなっているが、大きい決意を秘めたこのエーレックの言葉だけ

はさすがに短く、きびしい響をもっている。しかしハルトマンではこの言葉の鋭角的な強さは更に大きい。はげしい一言をあらわして他を手短かに説明文として整理しているが、これは言葉よりも行動をえらぶ人としてのエーレックの心境をあらわすによりふさわしい。この瞬間は物語全体の軸ともいえるもので、ここに示された深い自覚が、エーレックのエニーテに対する苛酷な態度や、以後様々な冒険へと立向う彼の内面的な動機となっている。宮廷叙事詩が、説明的な部分を排除し、事象の寓意的な配列によって實に多くを語る形式であり、微妙な内面の動きさえもそれによって語ろうとする形式であることはすでに述べた。上の翻譯態度を見ても、ハルトマンがこのような宮廷叙事詩の手法に關して、クレチアンにおとらず意識的であることがわかる。そしてこのような手法の範圍で、ハルトマンの叙述に原據の描寫を合理化するような補充や分析をも多く見出すことができる。

冒険の旅の途中、アーサー王の宮廷に迎えられ、先の冒険によってうけた傷を癒やされたばかりのエーレックは、人々の制止するのきかず、出發するのだが、ハルトマンはそれにつづく章を次のような言葉によって語り始める。

Nû reit der ritter Êrec als in bewiste der wec, erne weste selbe war: sîn muot enstuont niuwan dar da er âventiure vunde.
(5287—5291)

今や騎士エーレックは道の通ずるままだこへ行くのかも自身で知れず騎行した。彼の心はただ冒険に出會う所へとむかっていた。

ハルトマンは主人公の内面の動きに眼を向けながらも、先の比較からもうかがえるように、それらのあらわれを事象のもつ寓意や象徴に期待する人である。しかし一方ではクレチアンが主人公をアーサー王の幕舎を辞去してからただちに二人の巨人と對決させているのに對して、そこにあらためてこのような言葉をそえねばならぬほど主人公の自己淨化への願いの激しさ、總じて行動の背後にある心情の世界にたえまなく眼をそそいでいる人であった。ここには自

己に對してきびしいアスケートの風貌がみとめられる。

クレチアンの原據からは實に多くの事象がその寓意や象徴と共にハルトマンの叙事詩の中に移し植えられた。勿論この際ハルトマンは叙事詩の部分が全體に對してうけもつ機能について殊に明敏な意識をはたかせている。ただこの時ハルトマンの叙事詩を根本的に解釋するのならば、原據よりそのまま受入れられた寓意や象徴の價が、どのように原典の中にあった時より變えられ、別の意義をあたえられているかをも考えてみなければならない。

例えば彼が旅に出た最初の日の夜の冒険の意味を考えてみよう。ここでは先ず円卓騎士エーレックが二度までも盜賊を相手にたたかわねばならぬことが、それまでの優雅な宮廷的な生活様式とははなはだしくへだたった屈辱として印象づけられる。エーレックの自己教育の過程は宮廷的な雰圍氣の外にある非道な世界で行なわれることに意義があった。エーレックが今や全く別の世界に生き、自己を試み始めたことを深く意味づけること、しかも盜賊の人數を變え、二度同じ冒険をえがいて、それを強く印象づけることがクレチアンの原據における用意であった。そしてハルトマンもこの冒険の意味をそのように解釋し提出するが、しかし彼はさらに重要な強調をもってそれをしている。クレチアンはこの盜賊を „uns chevaliers qui de roberie vivoit” (2796—2797)「盗みにより生計をたてる一人の騎士」として登場させ、二人の從者と共に楯、槍をもってかなり長くエーレックと對等の闘いをつづけさせている。一方ハルトマンではエーレックの相手は „drie roubære” (3115)「三人の盜賊」であり、
 „in wâren bein und arme blôz; des Êrec an dem sige genôz:
 si wârn gewâfent slehte, nâch der rouber rehte: daz was Êrecke
 guot. ir ieglich het ein îsenhuot zuo einem panziere: des het er
 si schiere zuo ein ander geleit.” (3225—3233)「彼等の脚や腕はあらわ
 であった。そのためエーレックは勝つことができた。彼等の武裝は盜賊のこと
 とて粗末なものであった。それがエーレックには好都合であった。彼等の各々

は甲冑の外には鐵かぶとをつけていただけだ。それで彼は彼等を間もなく次々と倒したのだ。」とあるように、その粗末な武裝と叙述の軽いあしらいによって、いかにも彼等はクレチアンの場合よりは下等な相手として描かれている。

直接には盜賊の武裝に關していわれたこの言葉の意味も充分吟味されねばならない。中世文學では一般に唯一つの外形描寫が、ある事柄や狀況への冗長な説明に代わる可能性をつねに持っている。ここにはあらゆる宮廷的な生活様式に別れをつげたエーレックが自からえらび出した境地が、その野蠻で粗野な特性をむき出しに描き出されているのであり、この地にはびこる無秩序と粗野は、つねに前者の秩序と優雅への意識的な對比によって提出されている。ここには物語全體の構成やその意味について意識を深めた作者の態度がいちぢるしく認められるのである。それはまたクレチアンの物語の内容を適切な強調によってドイツの讀者に解釋して見せる態度でもあり、ハルトマン自身が物語作者の仕事の中で當時の物語の讀者の役割をも多く果している。

このように物語内容への悟性的な理解から出發して、更にその内容を自己の下した解釋の方向へ明確に變えて行こうという詩人の配慮は周到な用意をもって、この物語全般に及んでいる。エニーテをうばおうとした伯爵が、エーレックを呼びとめるとき、クレチアンに相當するものを見ない „sehent umbe, ir arger diep!” (4171) 「かえせ、惡黨！」という言葉までハルトマンが用いさせるのは、やはりエーレックの放浪中の屈辱的な立場をそれによって強調するためであろう。そして、エーレックがエニーテに盜賊の馬を引かせるということ、一つの言葉さえ自身に話しかけることを禁じるということは、エニーテにも屈辱的な生活が強要されたことをあらわすのであり、しばしば苦しい狀況においてもお互いに協力することを禁じられたみじめな狀況が描かれる。エーレックが自身とエニーテに強制するところのこれらの孤獨と屈辱は彼等が最後のな至福にいたるまでつづけてゆく旅のおよそ前半を基調となつて流れているもので、それらは單一の出來事ではなく反覆や並列によって、事柄をこえて抽

出される意味の世界を目指している。それらの描寫は箇々の出来事への關心によって充分満たされたものではない。むしろ一つきりの事柄に向けられるものとしてはあまりにも素朴な描出の態度があたかも他の同じような部分との關連を期待させる。われわれはそれら關連性がはじめて語り始めるものを待たねばならないのである。

二度にわたる盜賊の出現とそれにともなうエーレックがエニーテに與える二度の懲罰は、むしろ繰返しという形式的な特徴によって、讀者の心を事柄への關心から事柄の意義の抽出へと促すのである。しかし、クレチアンはそれをまだ事象の描出を主として、何氣ない作者の素振としてほのめかすだけ充分リアリストであったが、ハルトマンにはいかにも事象の意味の輪郭を鮮明にするような言葉使いと、關連する事象の共通部分を引き立てる手法があるために、この作品の各部分のアレゴリーを尖鋭化し、具象性のあみ出す作品世界をひときわ理念の世界へと近づける。

それ故ハルトマンでは、エーレックのエニーテへの譴責の言葉も直接話法によって意味を強めて書かれているのである。

ich wil iuch ze knechte hân die wil wir sîn ûf disem wege.
nû nemet diu ros in iuwer phlege und bewart si alsô schône
daz ich iu mit übel iht lône. (3430—3434)

この旅をつづけている間は私はあなたを自分の下僕としよう。さあ馬の世話を立て派にして、もう私があなたを手ひどくこらしめることのないようになさい。

Les trois chevaus li comandoit devant li mener et chacier,
et mout la prant a menacier, qu'ele ne soit mes tant hardie,
que un seul mot de boche die, se il ne l'an done congié. (2916
—2921)

彼は自分の前を歩いて三頭の馬を追いたてるよう彼女に命じた。そして彼が許もしないのにあえて一言でも話したりすることのないよう彼女をおどし始

めた。

主人公が冒険を求めて彷徨する内的な動機として自からを淨化し高めようとする心の欲求があることはハルトマンの方により明確な表現が見られた。そしてまた宮廷的な優美な生活様式やエニーテとの協同の生活をも進んで拒否し、あてどない放浪と苦しい冒険に自身をゆだねる過程では、その辛勞と屈辱の具体描寫において彼がいつでも原據より極限的なものをえらんでいることも明らかに認められる。

ところでこれらは單なる強調としてここにあるのではない。本来エーレックの物語は一人の若い騎士の人間完成と理想の生活様式の習得を中心的な内容としているので、主人公に關して狀況の推移や變化を關連的に描き出すことが詩人の重要な課題となるはずである。そのためにクレチアンはすでにそのような事柄の表現にかなう創意を物語の構成に示している。第一部の展開はすでに一つの物語を成立させるに足る事象の發端から終局までのカーブをえがいている。その終りの部分で主人公はいわば疑似的な人間完成の段階にあるということができよう。第二部は主人公の弱點があらわれ、そのような騎士の人間完成の問題が再吟味される所からはじまるのである。この第一部から第二部への導入のいかにも問題提出的な性格は、各々の冒険譚が全く並列的に語られて行く第二部の様式の中でも改められるのではない。つまりこの第二部の *âventiure* を時の経過に忠實に配列すれば、

(1)盜賊との二度の冒険—(2)ガーロエィン伯爵との冒険—(3)小人王ギィヴリッツとの冒険—(4)アーサー王の宮廷への歸還—(5)オリングレス伯爵との冒険—(6)ギィヴリッツとの二度目の冒険—(7)宮廷の喜び (*Joie de la curt*)—(8)アーサー王の宮廷への最後の歸還—(9)カルナントへの歸還。

上のようなものであるが、この中で(2)と(5)はエニーテの美しさに心をうばわれた伯爵の物語という點で前後に照應するのである。さらに(3)と(6)及び(4)と

(8)の内容上の照應は指摘するまでもない。Hugo Kuhn は第二部全体の構成を、前後に照應し合う *âventiure* を各々三つずつ持つ二つの *âventiure* の群、(1)～(4)、(5)～(8)と考え、カルナントへの歸還をこれらの区分の外におく。さて Kuhn はこれら素材群は發展的に見て二つの生活段階をあらわすものでエーレックとエニーテは第一の冒険系列では意識して反宮廷的な状況のもとに、第二の系列では、それらと同様の冒険が、新しく得られた宮廷的な生活形態の中で示されていると考えるのである。ハルトマンの様々の強調の方向は各題材の全體に對する表現上の効果や機能に關して彼が原據の構成の意味をよく理解していたことを物語っている。屈辱的な状況のもとにエーレックのさまざまな苦しみを最初の素材群において強調することは、ことに後半への照應の意味を強めることとなり、それは主人公の人間成長の過程を明瞭に浮彫する。

個々の事象にやどる寓意と象徴性の並列や對比によつて様々な内容をあらわして行くのが中世文學の手法なのであるが、この場合の事象と意味の特異な關連を二人の詩人についてくらべながら、この手法の本質をさらに考えてみたい。例えば第三と第六の冒険の照應を兩者はどのように取扱うかを觀察してみよう。ハルトマンは第三の冒険の中で、小人の王、グィグレィツを禮儀正しい完全な騎士として登場させる一方、エーレックをことさら未熟な騎士として描いていることに注意しなければならぬ。

ez hete der herre guot gelücke unde richen muot unde hete
unverzaget den pris an manegem man bejaget. (4303—4306)

このすぐれた騎士は幸福にめぐまれ、さかんな意氣を持ち、今まで多くの男から勇敢に勝利を勝ち得ていた。

だがこれほど武勇すぐれた小人王の挑戰にエーレックはおびえ、相手からその騎士としての眞價を疑われるのである。

„ich hân verre geriten und solhe arbeit erliten daz aller

mines herzen rât unwillentlichen stât.” der herre dâhte „er ist verzaget, sit er sine arbeit klagt.” (4361—4366)

「私は長く旅をして非常な苦しみをこうむった。それで私の心は何もすることを望まないのだ。」相手の騎士は考えた。「彼は自分の苦しみを人に訴えるのだから、臆病なのだ」と。

第三の冒険でこのような対照の関係におかれた二人は第六の冒険でふたたび闘うこととなるのであるが、この時の彼等は正に先の場合と逆の関係によって描かれる。最初の闘いでグィヴレイツからうけた槍傷が癒えぬためここでエーレックは相手に突かれて落馬する。その時彼が相手に告げた言葉は次のようなものである。

swelch man toerliche tuot, wirt im's gelônnet, daz ist guot.
sit daz ich tumber man ie von tumpheit muot gewan sô grôzer
unmâze daz ich fremder strâze eine wolde walten unde vorbe-
halten sô manegem guoten knehte, dô tâtent ir mir rehte. (70
09—7018)

誰か愚かな行いをするとして、彼がその報いをうけるならばそれでよいのだ。愚かな私が、その愚かさ故身のほども知らず、他國の公道を一人で支配し、多くのすぐれた騎士にゆずろうとしなかったのだから、あなたは私に當然のことをしたわけだ。

ここで道を妨げないということは共同社會に對して個人が守るべき義務を自覺することの象徴であり、エーレックが闘いにやぶれてこのようなことを悟るとき、これまでは多く一騎打における勝敗という外形的な構圖の中で見られていた全體が、エーレックの精神の熟成を表にあらわして動きはじめる。本來中世社會では個人が共同體への義務に忠實であることは最も大きい美德として、すぐれた騎士に要求されることである。これはエーレックの到達したより高い

境地をあらわす重要な言葉であろう。ところで他の冒険を中に介して前後に照應し合っているこれら二つのエーレックの心の段階は、よく観察すればそれに附随する多くの対比的な要素をもっている。先の冒険では相手のグィヴレィツがすぐれた騎士であり、一方エーレックは臆病者でありながら相手に勝っている。後の兩者の關係はすべての點で逆である。グィヴレィツは、エーレックを助けるためかけつけるが、すでに以前のように冒険を求める勇敢な騎士ではなく、

„zwivelhaft und unvrô sô kêrte der kûnec balde gegen dem walde.” (6856—6858)

「ためらい案じながら王はすぐ森に向った。」のである。しかも以前よりすぐれて成長したエーレックはこの時グィヴレィツに敗れている。氣負った若者の勝利に對して、後の敗北の主は心の餘裕と正當な判斷によって宮廷的道德のすべてをそなえた完全な騎士としてあらわされる。この二つの冒険の間にはかなりの時が経過しているから、すべてが一見偶然のようでありながらハルトマンの描き方には明確で意識的な對立の構圖がある。讀者はここに作者の配慮を知り、叙事の最も重要な内的脈動をそこから汲みとることを暗に要求されているのである。

ところでクレチアンがこの第三と第六の冒険をどのように取扱っているかを見よう。彼は第三の冒険で、たたかう二人の性格や能力の間に何の落差をも設けていない。そこでは望樓よりエーレックの近づくのを見た小人の王 Guivret が闘いをいどめば、エーレックもただちにそれに應じている。兩者は對等の立場でたたかい、たたかい終ればお互いに名を告げあう。ことに小人王の武装については詳細な報告があり、また „De lui vos sai verité dire, qu'il estoit mout de cors petiz, mes de grant cuer estoit hardiz.” (3678—3680) 「彼についてあなた方に本當のことをいうことができる。彼は身體が非常に小さかったが、その大きい心臓は大胆であつた。」とはいわれているが、それはこの部分でエーレックの資質への對比の意味を構成しない。また第六の冒

険では、グィヴレイツが友と知らず相手を馬から突き落したことをあやまってひざまずくと、エーレックは手短かに次のように答えている。„Amis! relevez sus! de cest forfet quites soiez, quant vos ne me conoissiiez.”

(5090—5092)「友よ、お立ちなさい。あなたは私が誰か知らなかったのだから、この過ちを許されねばならないのです。」勿論これだけの言葉にはハルトマンがエーレックに與えた高貴な寛容の精神はあらわれていない。この二つの冒険について原據とハルトマンの作品を觀察してみると、クレチアンの與えた素材の中にハルトマンは更に微妙な段階をもうけ、前後に照應する部分を作り、それらによって實に多くの事を語ろうとしていることがわかる。そこにはすぐれた騎士への完成の過程が、明らかな意義の照合のもとに語られているのである。二つの同様な冒険をかなりの時の経過を介在させて設ける方法はクレチアンのすぐれた創意であろう。しかしハルトマンは原據の構成的な意味を充分理解していただけてはいない。それらの中に原據よりも更に微細な意義の照應や比例を作ることによって、素材が持っている表現の可能性を擴張し、作品世界の象徴性を深めている。

一般のアーサー王物語の中では人間形成の完了は主人公が王の宮廷へ歸ることによって象徴されるのである。しかしこの物語は第二部の冒険群の半ばでエーレックを宮廷に歸らせている。エーレックが明らかにまだ未完成であり、彼自身は宮廷へ歸ることをこばんでいるのに、ガーヴェインのたくらみによって彼は王のもとに歸ることとなったのである。彼が歸ると、グィヴレイツから受けたその傷は女王自身の手で手當され、エーレックと共に苦しい旅をつづけたエニーテも人々の同情と慰めの言葉をうける。騎士として立派に完成された主人公がこの叙事詩の最後をかざって宮廷に歸るとき、彼はマボナグリーンに討たれた騎士の寡婦八十人を王の宮廷につれ歸ってその悲しみを解いてやる。ここにはみずから苦痛と悲しみを慰められねばならないような歸還と、他の大勢の苦痛をやわらげるような宮廷への歸還が明らかに對位的におかれている。

先の宮廷への歸還は後の歸還の意味、つまりそのはなやかでめでたい叙事詩の終結を同じ題材に與えられた相反する性格によってひときわ引立てるためのものである。ここでも獨立した叙事内容の意義が大きいのではなく、むしろそれが他に對する機能性が第一に考慮されていると見なければならない。ところでこの寡婦達への慈善はクレチアンにはない題材をハルトマンが導入したのである。そこに彼が素材の對位的配列を自己の物語の重要な手法として認めていることがわかる。この作品の描寫は概して個性的で一度きりの内容の故にそこにおかれたものというよりは、他の事象との關連のために、またはそれ一つによって象徵される多くの事柄の故にそこにあるといえよう。描寫の重點がそこにあるので、しばしば事象が具象性の領域で大きい空白をはらむ不思議な象徴の枠組だけで示されながら描かれることもある。

今までは對位的に配列された冒険の意味を見たのであるが、ここでその對位關係の外におかれた一つの物語、「宮廷の喜」と呼ばれる庭園のことについて叙事詩の中でそれが占める位置などを考えねばならないだろう。他の冒險群はその對比的な性格によって、主人公の完全な騎士への成長を示すのにふさわしいものであったが、この説話は物語全體の思想をきわめて密度の高いアレゴリーの形で示しているのである。個人的なミンネの生活と社會生活の關係についての作者の見解がここではきわめて寓意的な筆致で語られている。そういう意味からこの部分は主人公の遍歴を語る他の部分の中にはめこまれて、作品の思想を一點に凝結したような異質の部分となっている。

まずこの不思議な庭園のアレゴリーを解釋してみよう。

ich sage iu daz dar umbe mûre noch grabe gie, noch in dehein
zûn umbe vie, weder wazzer noch hac, noch iht daz man
begrifen mac. (8702—8706)

その庭園のまわりには壁も堀もなく、また垣根もそれを取りまいてはいなかった。水も樹々の茂みも、およそ人が手でとらえることのできるものは何一つ

それをめぐってはいなかった。

ところでこのようにうち開けた庭園でありながら、それは同時に何人も足を入れがたい深くとぎされた場所でもあった。そのまわりには平坦な道が通じていたが、誰一人その中へ入ることはできなかった。ただ片隅のかくれた場所に細い道が一筋中へと通じていた。偶々この場所に入って来た人がそこに見出すものはただ心になうものばかりであった。いろいろな種類のすばらしい樹木、それらは片側が果實をつけ、他の側は満開の花を咲かせていた。この果實を人は欲しいだけ食べることはできたが、残ったものは持ち出すことができず、そのままにしておかねばならなかった。ここには、この庭園そのもののように、外界に對して閉ざされた愛を営む一組の男女が暮しており、しかもこの二人は *adel* (高貴), *minne* (愛), *triuwe* (誠實) のすべての要件をそなえているようである。婦人はエニエテに次いでこの世で最高に美しく、騎士の勇敢さはならびない。しかも彼等の住む故にこの庭は喜びをすっかり失って (*wan mit mir was im benomen elliu sin wünne gar und was êt schœner fröuden bar. 9592—9594*) 宮廷の喜びは全く消え去った。(*sô ist êt Joie de la curt gänzlichen nider gelegen. 9600—9601*) そしてエーレックがこの騎士に勝つとき、はじめてその喜びは回復される。

この庭園は名の通りに宮廷的な喜びを意味するもので、それは萬人に開かれてはいるが特殊な方法によってしか得ることができない。今ここに住む一組の男女は宮廷的な愛の喜びをあらわすが、その喜びはとぎされたものであり、最後の要件を欠いている。この愛の要件をエーレックは騎士マボナグリーンと戦うことによって、このとぎされ、停頓した境地にもたらすのである。

この愛と喜びを完全ならしめる最後の要件とは、外界から遮断された愛の世界であることをやめてそこに他の人々との交流をもたらすこと、閉ざされた愛の世界に住まず、人々の中に住むことであろう。この作品構成の原理は、同

じような生活の様相が時をへだてて對位的にえがかれ、共通性の中にことさら時間の経過がもたらした相違點を目立たせるというのであった。詩人はこの方法によって、一人の騎士の成長をとらえてきたのである。ところでこの庭園の様子は、エーレックのたどった過程を要約的に再現しているのである。その社会性を失い、外に對して閉鎖的になった愛の主人公が社会(宮廷)にもどってそこに宮廷の喜びが回復される。この構圖は、その意味する所にきわめて直接的な象徴の形をえらんでここにあらわされている。しかもエーレック自身が一騎打によってその愛の回復に参加するということが重要な意味を帯びる。ここではマボナグリーンに勝つということが、閉鎖的な愛の克服を意味するのである。このような克服は、すでにその苦しい遍歴の過程によって實質的にはなされていたのであるから、これは純粹に象徴として全体の過程を完了する意味でここにおかれたものと受けとられよう。

エーレックとエニーテの旅はここで現實の領域から飛躍して、きわめて寓意的な世界へとおかれた。それがこの物語の精神を要約する重要な部分であることは、彼がイヴレイン王からこの庭園の話をきいた時の豫感にみちた言葉にも示されている。

ich weste wol, der sælden wec gienge in der werlt eteswâ,
rehte enweste ich aber wâ, wan daz i'n suochende reit in grôzer
ungewisheit, unz daz ich in nû funden hân. (8520—8525)

仕合せへと通ずる道が、この世のどこかにあることはよくわかっていましたが、それがどこだかわからなかったのです。ただ私はそれを求めて非常に不たしかな旅をつづけました。とうとう私は今その道を見付けたのです。

今まで一つの場所に止まることなくつけられた旅が、ベネフレックの館での十四日間の滞在によって終り、時の推移を軸として成立っていた叙事の進展が、この時こととなった次元へと置きかえられたことは豫測されたが、ここに全

く時間性から隔絶した一つのアレゴリーの世界が開け、物語がふたたび現実的な道筋にそって進行する時、それはこのアレゴリーの生み出した別の平面を進んで行く。物語の進行が時の流れを中斷してそこに時間の外に広がるアレゴリーの世界をあらわし、それによって時間の支配する現実を高所から解析した後、先の現実的なものを繼續させている。

この庭園のアレゴリーではハルトマンがきわめて忠實に原據を踏襲しているが、物語の結末は非常にちがっている。クレチアンではアーサー王がナントでエーレック夫妻に王冠をさずける儀式の有様をつたえて物語が終っているが、ハルトマンはエーレックが父王の死後、故郷デストレガーレスの王となり、その主都カルナントでエニーテと生活する様子をえがいている。ハルトマンはそれによって、これまでの冒険の意味を歸納し、彼等が最終的に達した境地を示すのである。

「傳えられた物語が彼についていう所では當時生きていた人々のうち、多くの國々でその功業によって彼以上の賞讃を得た者がいないほどであった。彼はたえられて『驚異の勇士、エーレック』と呼ばれた。彼については彼の本体と影が、あらゆる國々にあまねくあるといった風であった。そのようなことがどうしてあり得たかと聞かれるのか。彼の肉體がどこかにあれば、彼の賞讃は他の場所にあった。それで世界は彼で満ちていた。何人も當時彼はほどよくいわれる者はなかった。」(10036—10052)

「王自身今ではできる所ではどこでも彼女の希望を尊重した。だがそれが彼にふさわしい限りにおいてであり、以前彼がしたように彼女のために怠惰になることがなかった。なぜなら彼は名譽にかなった生き方をしたのであり、それで神はこの地上の王冠を彼に與えた後、父親らしく彼とその妻に永遠の生命を與えられたのだ。」(10118—10128)

ここでは、きわめて象徴的な言葉で倫理的な理想の次元が語られているので

ハルトマンの叙事詩「エーレック」

ある。そして歸郷と即位がそのまま内的彷徨よりの歸郷を意味している。ハルトマンの外的な事件の展開はつねにこのような内的展開への最も直接的な指示となり、中世的で素朴な兩者の一致によって彼の文學は特色づけられる。